七言絶句の世界に魅了

還暦を過ぎて創作を始めた漢詩の作品から375首を選び、解説を加えた著作を発刊した高嶋睦徳（あつのり）さん（81）＝観音寺市粟井町＝。「自分に一つだけ与えられた素晴らしいものに出合えた」と感謝する。

元々、漢詩はおろか文章を書くことも縁遠かった。徳島大工学部を出て関西が地盤のゼネコンに勤務。大阪市の地下鉄や四国の高速道路の建設に従事した。

退職後にさまざまな文化芸術に挑戦してみたが、どうも合わない気がした。転機は参加した詩吟教室。漢詩を大声で朗詠するうちに七言絶句の奥深い世界に魅了された。以来、漢和辞典と首っ引きの日々。「ある漢字を引くと、また次の漢字を調べたくなる。面白くて」。ぼろぼろになるまで使い、現在3冊目になる。

漢詩に詠んだ題材は動植物、神社仏閣から人生訓、歴史上の人物まで幅広い。本紙「一日一言」を愛読し、心に響いたものが一言子と同じだと膝を打つ。そして創作につながる。

思い入れの強い作品として「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」を挙げる。在職中に圃場（ほじょう）整備のため除去した一面のヒガンバナへの「鎮魂歌」なのだという。全日本漢詩連盟会長賞に輝いた代表作でもある。

「還暦を過ぎて漢詩の創作に没頭した」と話す高嶋さん

あの人　この人